

フィジー農村集落におけるエコツーリズムの実践と課題

竹田美理

キーワード： フィジー農村集落、エコツーリズム、地域資源、開発支援

1. 研究の背景と目的

「持続可能な開発」に向けた取り組みとして、エコツーリズムの環境保全や地域経済への効果が数多く報告されている一方、地域住民の生活がないがしろにされているという指摘も少なくなく、エコツーリズムに関する様々な議論がされてきたなか、フィジー共和国は政府が中心となって、従来のリゾート観光からエコツーリズムへの転換を行ってきた。その特徴は、その豊かな自然を楽しむアクティビティや、伝統文化を体験できる農村へのツアーである。フィジーの農村では、近代化の影響による経済的な困窮が問題視され、その解決のために国際機関による支援のもと、エコツーリズム開発プロジェクトが実施されてきたのである。しかし、フィジーの伝統文化を無視したエコツーリズム開発による弊害や、小規模事業への支援不足などが課題として指摘されている。そこで本研究では、外部機関による開発プロジェクトに基づかずに、エコツーリズムに取り組む農村集落の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

調査方法は、文献調査によるエコツーリズムの評価軸の設定と、現地調査による農村集落でのインタビューを中心とした。文献調査では、フィジーのエコツーリズムの課題と指摘されている、伝統文化の変容と小規模事業への支援不足に着目して、エコツーリズムの国際的共通認識、及びエコツーリズムにおける住民の主体性と外部組織との関係に関して行い、具体的な課題を抽出するための評価軸を、①住民が地域資源を活用し、持続性を考慮して取り組んでいる、②住民が農村集落の生活向上を目的とし、主体となって自発的に取り組んでいる、③住民が外部組織との協力関係を築き、必要十分な支援を受けられている、と設定した。現地調査では、ナタレイラ村、コロバ集落、及びナバラ村で、エコツーリズムに関わる住民に、エコツーリズムの内容、住民や外部組織の取り組み状況、現在に至るまでの変遷等に関してインタビューを行い、エコツーリズムの現状をまとめた。この結果を評価軸により考察し、3村を比較することで課題を明らかにした。

3. 調査結果と考察

3村におけるエコツーリズムの共通課題は、取り組みの持続性、住民の主体性、外部組織による支援にあった。

(1)持続性：ナタレイラ村では規模拡大、コロバ集落では若い世代への技術伝承、及び材料調達の問題、ナバラ村では観光資源の未認識が見受けられ、持続性が十分に考慮されていない。この要因として、政策で持続性に関して明確に言及されていないこと、また、住民と外部組織とのやり取りが不十分であることによる、住民の認識不足が挙げられる。

(2)住民の主体性：ナタレイラ村では村の目的と事業計画の乖離、及び立場の弱い住民の存在、コロバ集落では自発性の不足、ナバラ村では利益の不平等な分配が見受けられ、住民が主体となれていない。この要因として、外部組織と農村集落の立場が不平等であること、また、住民の能力開発が不十分であることが挙げられる。

(3)外部組織による支援：ナタレイラ村では立場の弱い住民への無配慮、コロバ集落では事業化への未支援、ナバラ村では地域資源継承への未支援が見受けられ、外部組織から必要十分な支援を得られていない。この要因として、分野を越えた外部組織間の連携が弱いこと、また(1)の持続性と同様に、住民と外部組織とのやり取りが不十分であることが挙げられる。また、ナタレイラ村と他の2村の相違点から、多分野の外部組織から支援を得ることで、1つの資源に集中するのではなく、資源活用が多様化した一方、規模の拡大が懸念されることがわかった。そのため、持続性の観点から小規模で行うことに対する認識を高める必要がある。

このような課題をふまえ、エコツーリズムの今後に向けた提案として、住民の主体的な取り組みに向けた能力開発、及び、多分野にわたる外部組織の連携のもと、住民と外部組織が平等な立場で双方向的なやり取りを行い、伝統に基づきながら地域資源を小規模かつ多様に活用するべきであると考えられる。